

I. 歓迎とレビュー

A. おはよう! おはようございます! カルバリーチャペル岩国へようこそ。

1. 新顔やネット配信者を歓迎する。抑止力

B. これ以上話を続ける前に、小学生の子どもたちを日曜学校の教室に解散させよう。

1. (2<sup>nd</sup>礼拝; 聖書英語のクラスは忘れずに解散する)

C. 今朝は、ヘブル人への手紙、そして聖書全体の中でも特に重要な章の冒頭である。

1. 聖書には、特別な意味を与えられ、多くの聖書愛好家や読者によく知られ、大切にされている章があると思う。

a. 詩篇119篇がある。聖書の中で最も長いこの章は、神の言葉というトピックに完全に捧げられている。それがどれほど豊か、どれほど力強く、どれほど確かで安定していて、私たちにとって有益であるか。私たちは神の御言葉の上に人生を築くことができ、神の御言葉は私たちを導き、導いてくれる。

b. コリントの信徒への手紙一13章に "愛" の章がある。神の愛について、そして主との歩みにおいて愛がいかに重要であるかについて語っている。愛がなければ、私たちは鳴り響くシンバルにすぎない。

c. 創世記第1章は、すべての始まりの場所である。創世記1章には、創造の6日間の概要と、神がどのように宇宙とそこにあるすべてのものを語り、存在させたかが記されている。

d. 詩篇23篇は、よき羊飼について教えている。いかに主が私たちを静かな水のほとりに導き、私たちの魂を回復させてくださるか、いかに私たちが死の陰の谷を歩むとしても、災いを恐れない。

e. イザヤ書53章と苦難のしもべについてはどうだろう。イザヤ書はキリストの十字架刑について預言しているのだが、その明瞭さと詳細さは、彼の文章がそのままNTの福音書の一節から飛び出してきたのではないかと思わせるほどだ。

2. 今朝は、信仰にまつわる章であり、信仰の英雄たちを浮き彫りにする章である。このヘブル人への手紙11章は「信仰の殿堂」と呼ばれている。

a. 多くのスポーツには "殿堂" と呼ばれるものがある。それぞれのスポーツのレガシーに多大な貢献をし、そのスポーツのアンバサダーや競技者として優秀な成績を収めた人々を称え、表彰する場所である。

i. アメリカにも日本にも、それぞれのスポーツが成功し続けるための道を切り開いた人々を称える博物館のような、人々が訪れることのできるさまざまな殿堂がある。

ii. アメリカでは、ニューヨーク州クーパーズタウンに全米野球殿堂、オハイオ州カントンに全米フットボール殿堂がある。

iii. 日本にも野球殿堂と日本フットボール殿堂があるが、それはアメリカンフットボールではなく、多くのアメリカ人がサッカーと呼ぶものの殿堂である。

b. ヘブル人への手紙11章が「信仰の殿堂」と呼ばれるのは、優れた業績を残し、後世の人々の足跡をたどる道を開いた過去の人々を称え、称える多くの殿堂と同じように、ヘブル人への手紙11章もまた、信仰において優れた業績を残し、後世の多くの人々の足跡をたどる道を開いた数多くの信仰の英雄を列挙しているからである。

c. これからの数週間、私たちは主に向かって生き、信仰によって生きるとはどういうことかを示す偉大な模範となった人々の人生を振り返ることになる。

d. この章は、決して排他的なリストでも、すべてを網羅したリストでもない。ヘブル人への手紙の著者が彼ら全員について書くことは許されないだろう。

e. しかし、ここにあるのは、彼らが信仰によって人生を生きたことを見習い、そこから学ぶことができる、楽しくて勇気づけられる人々のリストである。

D. 今朝のテキストはヘブル人への手紙11章1節から7節までである。そして、メッセージのタイトルは「信仰の殿堂」である。

1. 今朝、皆さんが聖書を持っていることを願っているが、いなければ、遠慮なく手を伸ばして、周りの椅子の下にある聖書を借りてほしい。

2. ヘブル人への手紙11章を読んだら、神と神の言葉を称え、立ち上がっていただきたい。

3. ヘブル人への手紙の著者は、11章1節で、私たちの信仰の英雄たちを次のように論評している。

II. イントロ

A. 先週、10章を締めくくりにあたり、著者はハバククの言葉を引用し、信仰に耐え忍ぶよう聴衆を励ました。10章38節で、著者はハバククと「正しい者は信仰によって生きる」ことを引用した。(ヘブライ10:38a)。

1. 正義とは、一般的には「正しい」と訳される言葉である。これは、主の前に正しい立場にあるとみなされた人々のことを指している。

2. 私たちは誰ひとりとして自分ひとりでは正しくなく、誰ひとりとして自分ひとりでは神の完全で聖なる基準に適合することはできない。

a. 聖書はその方法について非常に明確である。ローマ3:10は、詩篇14篇や詩篇53篇など、聖書のさまざまな箇所から引用している。

コヘレトの書7章には、「正しい者はひとりもない。(ローマ3:10)

3. しかし、神の恵みが私たちの上に注がれているので、私たちには神と正しくなる機会があり、公正で義とみなされる機会がある。そして、それが実現する唯一の方法は、信仰によるのである。
4. 私たちは信仰による恵みによって、神と正しい関係になる。そして私たちは、神への継続的な信仰に基づいて、義の状態で生き続ける。
5. 主の前での私たちの正しい立場は、信仰によって入り、信仰によって継続される。ハバククが「正しい者は信仰によって生きる」と述べているのはそのためである。それは、信仰に従って人生を積極的に生きるという継続的なプロセスなのだ。
6. そして、この11章では、信仰を持ち続ける聴衆に拍車をかけるかのように、たちの偉業を振り返る時間を取っている。

B. メモを取るの好きな人、あるいはテキストを概説するのが好きな人のために今朝の聖句を大きく2つのセクションに分けよう。

1. 1-3節では、著者が信仰をどのように描写しているかに焦点を当てる。
2. そして、4-7節では、信仰の英雄たちがどのように信仰を注目する。
3. このテキストを読みながら、信仰の英雄たちの足跡をたどるために、私たち自身の人生にも適用できる重要な真理を得たいと思う。

C. まず、1-3節の「描写された信仰」を扱う最初のセクションを見てみよう。

III. ヘブル11:1-3; 信仰が描写されている

A. 信仰を扱った章の冒頭で、著者は最初の数節を割いて、信仰とは何かを説明している。

1. 節にあるのは、必ずしも信仰の定義ではないが、すでに述べたように、信仰の説明である。信仰と、信仰に関わるいくつかの事柄が書かれている。
2. 信仰の簡単な定義は、「誰かや何かに対する完全な信頼や確信」だろう。
  - a. この単純な定義から、人は人生の一日一日を通して信仰を実践していると言える。
  - b. もし信仰が単純に何かを完全に信頼することを意味するのであれば、私たちはそれをさまざまなことに応用することができる。昨夜ベッドに入ったとき、あなたは自分の肺が動き続け、心臓が鼓動し続けることを完全に信頼してベッドに入った。

- c. もしかしたら、今朝は携帯電話や目覚ましを信じていた人もいるかもしれない。セットした正確な時刻に何らかの音が鳴ることを、完全な自信をもって期待していた。
- d. 今朝、車で教会に向かったとしたら、あなたは信仰を行使したことになる。車のステアリングを握り、時速50キロまで加速させ、ブレーキを踏めば車は減速するだろうという完全な信頼と確信のもとに。
- e. 今朝、教会に来たとき、座った点検して、自分を支えてくれるかどうか心配した人はいない。
- f. もし私たちが信仰についてそのような基本的な理解で話しているなら、私たちは皆、信仰のヒーローになっているはずだ。私たちは一日中、信仰によって生きている。

3. しかし、聖書の信仰や神への信仰について語るとき、私たちはそれが何かや誰かに対する完全な信頼や確信以上のものを含んでいることを理解する。

4. このセクションでは、聖書が信仰、すなわち私たちが生きるべき信仰に関わる4つの異なる事柄を明らかにしたい。

B. 聖書の信仰について私たちがまず注目するのは、信仰には**実体**が伴うということである。

1. 信仰とは、実体である。この "substance" という単語は、"hupostasis" という単語である。これは複合語で、"hupo" は "under"、"stasis" は "to stand" を意味する。この2つの単語を組み合わせると、この物質は他の何かの下にあるものだと言える。
  - a. この言葉は、他のものの土台となるもの、何かの基礎となるものを指す。古典ギリシア語では、この単語は何かを築く土台を指すのに使われた。
  - b. つまり、信仰とは土台であり、支えであり望みの基礎なのだ。
2. 聖書が "希望" について語るとき、私たちはそれが現代の私 "希望" という言葉を使うのと同じようには使われていないことを理解しなければならない。
  - a. 現代英語で "hope" という単語を使うとき、私たちはそれを、私たちが願うこと、あるいは起こってほしいと思っていることを指すのに使うが、それが実際に起こるという保証や確信はまったくない。
  - b. 雨がやむことを "願う" ことはできるが、それが実際に起こるかどうかはまったくコントロールできないし、願っているからといって雨がやむという自信もない。
  - c. しかし、聖書が "希望" という言葉を使うとき、それはあるレベルの含んでいる。それは、何か良いことが起こることへの願望と、それを手に入れることへのある種の期待を含んでいる。
  - d. 聖書が "希望" という言葉を使うとき、そこには確信が伴う。それは、今はまだ手にしていないかもしれないが、やがてそれが実現するという確かな期待である。

3. もちろん、私たちがこれらの語るとき神が私たちに語られたこと、すなわち神の言葉と神の約束について話している。
- 私たちは、神が私たちとの約束をすべて果たしてくださいという確かな期待を持っている。私たちは神と神の御言葉を信じ、その約束の上に人生を築いている。
  - 神と神の御言葉に対する私たちの信仰は、私たちが望むものすべての土台となる。神が言われたのなら、それは必ず実現すると信じるのだ。
  - コリントの信徒への手紙二1章20節によれば、神の約束はすべて、神のうちに「はい」であり、神のうちに「アーメン」である。 **コリントの信徒への手紙二1章20節 A**
  - 神が言われたのなら、それはする。神への信仰によって、私たちは神と神の約束を完全に信じることができる。
- C. そしてこのことは、私たちのもう一つの要素に私を導く。私たちの信仰は、実体を伴うだけでなく、**証拠も**伴うのだ。
- 繰り返すが、世俗的な観点から証拠について語るときと、信仰に関連する証拠について語るときとは異なる。
  - 物理的な世界における証拠といえば、通常は目に見えるもの、耳に聞こえるものものを指す。
    - もしあなたが陪審員として召喚され、法廷に出席しなければならなくなったとする。あなたは、証拠が提出され検討される裁判に参加することになるかもしれない。
    - 証拠は目撃者の証言から得られることもあればある分野の専門家の証言から得られることもある。彼らの証言は聴取され、証拠として提出される。
    - あるいは証拠が目撃される。弁護士は、事件を裏付ける写真やビデオ、DNA鑑定書、毒物検査報告書、銀行取引明細書など、ありとあらゆる物的証拠を証拠として提出することができる。
    - これらはすべて、見たり聞いたりできるものだ。しかし、私たちが信仰の証拠について話しているのは、そういうことではない。
  - 節末尾に、信仰は目に見えないものの証拠であると書かれているからだ。信仰の霊的世界における証拠とは、私たちが自分のいるものではなく、目に見えないものである。
    - 信仰は自体、目に見えるものではない。風が目に見えないのと同じだ。私たちは風の影響を目にし、風が木々を動かすのを見、近所を吹き抜ける音を聞くが、それを見ることはできない。
    - それと同じように、私たちの必ずしも目に見えるものではなく、証しされるものである。
    - ヤコブはその手紙の中でこう書いている。あなたがたは行いを抜きにして信仰を示さない。(ヤコブ2:18)。

- つまり信仰とは、目に見えないものの証拠、証明なのだ。信仰は、目に見えたり物理的なものではないが、私たちの生活を通して、私たちの行いを通して、私たちの行動を通して、見たり聞いたりすることができる。
4. 私たちは信仰によって、主のために自分の人生を生きる。たとえこの地上での人生で神の約束がすべて成就するのを見ることができなくても、私たちはいつの日か神の約束がすべて実現することを信じ、私たちの人生はその事実を証明する役割を果たすことを意味している。
- D. 続けて、信仰には**神の承認も含まれる**ことがわかる。2節を読むと、「長老たちは、それによって（信仰について）良いあかしを得たのである。」とある。
- 良い証言を得るということは、神が神の承認を証言することである。
  - それは神の直接の認証のようなものである。長老たち」とは、この章の後半に列挙されている信仰の英雄たちのことで、ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、モーセ、その他大勢である。
  - これらの人々は皆、神の認証印、つまり彼らの人生に神の承認印を押されたのである。神は彼らの信仰を証しされた。そして彼らを承認した。
  - 人生において、人から認められたいという考えにとらわれがちだ。自分のもらいたい、好かれたい、尊敬されたい。だから、人の承認を求めようとする傾向がある。
  - しかし、この人たちは違った。彼らは人に認められることではなく、神に認められることに関心があった。
  - 使徒パウロは一時期、人からの承認と喝采を求めた人物である。彼は自分の肉に大きな自信を持っており、自分がいかに「八日目の割礼を受け、イスラエルの家系、ベニヤミン族のヘブル人であり、律法に関してはバリサイ人であり、熱心さに関しては教会を迫害し、律法にある義に関しては罪がない」と自慢していた。しかし、[彼は書いている]。私にとっては得であったものでも、キリストのためには損であった。わたしがキリストを得、キリストのうちに見いだされるためには、律法に由来する自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰によって神から与えられる義を得なければならないのです」。(フィリ.3:5-9)
  - パウロは一時期、人からの喝采を求め、自分の血統を自慢していたが、キリストを信じるようになってからは、それらすべてをゴミとした。彼はもはや人間の喝采や評価を気にせず、信仰によって喝采と承認を心から求めた。
  - これは神が私たち望んでおられることだ。私たちが信仰によって生き、することで主に喜びをもたらすことを。
- E. 本文に戻ろう。3節を見てみよう。この信仰の記述にはもう一つ重要なことが書かれて。信仰によって、私たちは、この世が神の言葉によって造られたことを理解する。

目に見えるものから作られたのではない」。信仰には以下が含まれる。  
神の言葉の力を理解することだ。

1. 著者は天地創造そのものを振り返っている。創世記1章に天地創造のことが書かれている。そして、創世記第1章から、神が世界を存在させるために語られたことを知っている。
2. 私たちが知っている世界は、この世界の物理的な領域とスピリチュアルな領域の両方を含み、神の言葉によって枠にはめられ、創造され、あるいは形成された。
  - a. これは神の語られた言葉を指している。
3. 創造の日々を振り返れば、神の語られた言葉のわかる。
  - a. 私たちは、1日目に神が「光あれ」と語られたことを知っている（創世記1:3）。
  - b. 日目に神は言われた、「大空が水の中であって、水と水とを分けるように」。(創世記1:6)。
  - c. 3日目、神は「天の下の水を一か所に集め、乾いた地を出現させよ」と言われ、その通りになった（創世記1:9）。
  - d. 地は草を生やし、草は見るものを産み、果樹はその種類にしたがって実を結ぶ。(創世記1:11)
  - e. そして4日目、5日目、6日目と続いた。神が何を語ろうと、それが起こったのだ。それが神の御言葉の力なのだ。
4. この世にある目に見えるものは、目に見えるものから造られたのではなく、神がそれを語られたのだ。神は語られた御言葉の力によって、無から有を創造されたのである。
5. そして、神の言葉の力を理解することは、私たちの信仰にとって決定的に重要である。神の語られる世界が世界や宇宙を存在させることができるほど、神が力強いお方であるならば、神が私たちに与えてくださった約束を実行に移せるほど、神は力強いお方だと思わないだろうか？
  - a. もちろんそうだ。神と神の言葉はとても力強いだから、唯一の合理的な反応は、神の完全な希望と信頼と信仰を置くことである。神の御言葉は力強く、発信された目的を成し遂げてくれる。
  - b. イザヤ書55章10節と11節には、こう書かれている。"雨が降り、雪が天から降って、そこに帰らないように、地に水を与え、芽吹かせ、種を蒔く者に種を与え、食べる者にパンを与える。(イザ.55:10-11)

F. これらすべてをまとめると、この信仰の説明には、実体が含まれ、証拠が含まれ、神の承認が含まれ、理解が含まれることがわかる。

1. 著者は、人々が信仰に耐え、忍耐し、あきらめないように励ますために書いていることを忘れてはならない。信仰を続け、信仰によって生き続けることによって、自分たちが正しく、公正であることを示すことを望んでいるのだ。(レビュー)
2. それで、彼は信仰をかき立てる方法として、このような信仰の記述をしたのである。私たちの信仰は、希望的観測に基づいているのではない。信仰には実体があり、私たちの人生を築く土台となるものだ。それは、私たちの明らかにされ、私たちが神に方法なのだ。そして私たちは、私たちの信仰が全能の神とその語られた御言葉の力にあることを理解している。
3. 神が言われたのなら、それは必ず実現する。このことはだ。神が御言葉と私たちへの約束を果たすのを止めることはできない。

G. さて、本文の最後となる第2節に目を向けよう。最初の節では、説明された信仰を扱ったが、次の節では、示された信仰を扱う。4-7節を一緒に読もう。

IV. ヘブル11:4-7; 示された信仰

A. この箇所では、そして章全体を通して、著者は1-3節で述べたような信仰を示したさまざまな人々に注目している。

1. 彼らは神と神の言葉を信頼し、神に対する確信を持っており、神と神の言葉を拠り所として人生を築いていた。これらの人々は信仰の人たちであった。神のお墨付きを与えられた人々だ。
2. そして、このテキストの最後の部分を読みながら、4節のアベルから始まる、これらの人々が主への信仰を示したさまざまな方法に注目したい

B. 4節の冒頭には、「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神にささげ、それによって、自分が義人であることのあかしを得た」と書かれている。

1. 私たちは皆、カインとその弟アベルの物語を知っているはずだ。カインとアベルは、神が創造した最初の人々、アダムとエバの長男である。カインは長男で、彼は最初に生まれ、弟で、二番目に生まれた。
2. ある日、カインが土の実を献げて主に捧げた。
3. アベルも主の前に供え物を捧げたが、その羊の群れの初子とその脂肪であった。
4. 創世記4章には、主はアベルとその供え物を尊重されたが、カインとその供え物は尊重されなかったと記されている。(創世記4:4b-5a)。

5. 両者とも主の前に供え物を捧げたが、受け入れられたのは片方だけで、主に認められたのはアベル一人だけだった。

- a. 興味深いのは、創世記にはなぜアベルが受け入れられ、カインとその供え物が拒否されたのかについての解説がないことだ。
- b. アベルとその供え物が受け入れられ、カインとその供え物が拒否された理由について、長年にわたって多くの人が推測してきた。
  - i. 供え物そのものに関係があると言う人もいる。アベルが捧げた群れの初子は、カインが捧げた土地の果実よりも偉大な捧げ物だった。
  - ii. ある人は、基本的に肉の供え物だけが主に受け入れられ、果物や野菜のようなものは劣っていると言おうとする。しかし、私たちの多くはそれに同意するかもしれない。つまり、ランチに大きなジューシーなステーキを食べるのと、葉物野菜のサラダを食べるのと、どちらがいいだろうか？
  - iii. また、イエス・キリストとその血の犠牲をよりよく指し示しているので、群れの捧げ物はより良い犠牲であると言おうとする者もいる。彼らは、ヘブル人への手紙の前の節にまで目を向け、イエスとその捧げ物がいかに優れたいけにえであるかを語ろうとする。
  - iv. カインの捧げ物は地から出たものであるため、地は呪われているという事実を指摘しようとする者もいる。なぜなら、その前の第3章で、アダムとエバが墮落した後、主はこう言われたからである。(創世記3:17b)。
  - v. この聖句をカインの捧げ物に当てはめ、カインが神に捧げたのは呪われた捧げ物であり、それは呪われた地から出たものだからだと言う人もいる。
  - vi. しかし、これらのどれも、肉はより良いもの、最高のものであり、土地の果実は劣っているという、供え物そのものに基づいているため、あまり意味をなさない。
  - vii. 聖書の後半で、神は人々が神に捧げ物を捧げる様々な方法を定めたとき、穀物の捧げ物、交わりの捧げ物、初穂の捧げ物などを受け入れた。神はこれらの供え物を歓迎されただけでなく、イスラエルの子らに対して、これらの特定の種類の供え物を神に捧げるように指示されたのである。
- c. だから、単にアベルが肉を持ってきたのに対して、カインが農産物を持ってきたというだけでは意味がないように思える。ここには何か別の理由がのだ。ヘブル人への手紙には、実際に何が起こっていたのかが書かれている。

6. 信仰によって、アベルはより優れたいけにえをささげた。アベルの献げ物とカインの献げ物との違いは何だったのか。それは信仰によって捧げられたからである。つまり、カインは信仰によって捧げ物を持ってきたのではないということだ。

- a. 実際、創世記の記述を振り返ってみると、神がカインと交わした後日談の中に、そ

のことが感じられる。

って、エノクは死を見ないように連れ去られた。

- b. カインは自分の捧げ物を受け入れなかった神に腹を立てていた。なぜ怒っているのか。なぜあなたは怒っているのか。もしあなたがよく行なえば、受け入れられるのではないか。もし、あなたがよくしないなら、罪が戸口にある。その望みはあなたがたにあるが、あなたがたはそれを治めなければならない」。(創世記4:6-7)
- i. 神は、それは供え物とは関係なく、供え物を捧げる人間にすべて関係があると強調された。カインは良いことをしなかった。彼は主を喜ばせなかった。それは、彼が信仰をもって供え物をささげなかったことを物語っている。神は、私たちが信仰をささげるときに喜ばれるからだ。
  - ii. カインは信仰によって動くのではなく、罪に誘い出されていた。罪は戸口にいて、その欲望はカインを連れ去ることだった。
  - iii. カインは、心の中で罪を犯しながらも、神のもとに来て供え物を捧げることができると思い違いをしていた。
  - iv. イエスは言われた、「もし、祭壇に贈り物を持って行って、そこで、兄弟があなたに恨みを抱いていることを思い出したなら、祭壇の前に贈り物を置いて、自分の道を行きなさい。まず兄弟と和解し、それから来て贈り物をささげなさい。」(マタイ5:23-24)。(マタイ5:23-24)
  - v. 原則は明白。主に捧げ物を捧げる前に、私たちは正しい心を持つ必要がある。神が私たちの捧げ物を受け入れてくださる前に、私たちは罪を処理する必要がある。
  - vi. カインの心は正しい場所になかった。罪は戸口に潜んでおり、彼の供え物は神を喜ばせるものではなかった。
- c. 一方、アベルは**礼拝を通して**信仰と神との正しい関係を示した。彼はより優れたいけにえを神にささげた。

7. 私たちはアベルの生涯と彼の模範を通して、私たちの礼拝と神に捧げるものに関して、神は私たちが何を捧げるかにはほとんど関心がなく、ように捧げるかに関心があることを知る。

- a. 神は私たちの最も気にかけておられる。礼拝において、私たちの心は正しい位置にあるのだろうか？ 神は私たちがただ宗教的な捧げものをするを望んでいるのではなく、私たちの心を求めておられるのだ。
- i. 詩篇51:17はこう宣言している。"神のいけにえは、砕かれた霊、打ち砕かれ、悔いる心です。(詩篇51:17)。
  - ii. 私たちの礼拝は誠実でなければならず、信仰の心からのものでなければならない。
- b. 私たちの礼拝は信仰の心から来るものでなければならない。

C. 本文に戻ると、次はエノクという人物から学ぶことになる。5節と6節を読むと、「信仰によ

1. カインとアベルの話はほとんどの人が知っているだろうが、エノクの話は聞いたことがないかもしれない。彼の物語は、このリストの他の人たちほど馴染みがないが、それでも彼の人生は信仰についての重要な教訓を私たちに教えてくれる。
  2. エノクという名は、創世記5章のアダムからノアに至る系図の中に登場する。
    - a. 5章の系図は、アダムから始まり、ノアとその3人の息子で終わる10世代の人間のリストである。
    - b. 詳細なことは書かれていない。It simply lists that so and so was this many years old before he begot so and so and after he begot so and so he lived another so many years, had other sons and daughters and died.このパターンが何度も繰り返される。
    - c. 系図を読んでいくと、エノクという人物に出会う。エノクは六十五年生きて、メトシェラを生んだ。エノクはメトシェラを生んでから三百年間、神とともに歩み、息子や娘をもうけた。それで、エノクのすべての日は三百六十五年であった。エノクは神とともに歩んだ。(創世記5:21-24)。
    - d. エノクは系図の中で唯一、ある年数の後に死を経験しなかった人物である。系図に列挙されている他の人々は、エノクを除いてすべて死んだ。
      - i. 実際、聖書全体を見ても、死を経験しなかった人物は二人だけで、一人はエノク、もう一人は預言者エリヤである。思い起こせば、エリヤは、列王記下2章によれば、火の馬に牽いられた火の戦車に乗って、主によって天に上げられた(列王記下2章11節)。
    - e. さて、5章の系図でもう一つ興味深いのは、列挙されたすべての人々の中で、エノクだけが神と共に歩んだと言われていることだ。
      - i. 5章では、このようなことをした人は他にいない。もちろん、アダムが墮落前にエデンの園で神と歩んだことは知っている。後の創世記6章では、ノアも神と共に歩んだと記されている。しかし、神と共に歩んだと記録されている人の数は非常に少ない。
    - f. このエノクという人物は非常にユニークな人生を送った。彼は神と共に歩んだが、ではなく、神は彼が死を味わうなく、ただ彼を連れ去ったのだ。
    - g. エノクの信仰は、主との歩みを通して示されたものであり、彼は私たちに神との歩みの重要性と、その歩みを通してどのように主に喜ばれることができるかを教えている。
    - h. エノクは神を喜ばせたが、6節によれば、その唯一の方法は信仰によるものであった。信仰なしに神を喜ばせることは不可能である。神に近づく者は、神がおられること、また、神は熱心に求める者に報いてくださる方であることを信じなければならない。
  - i. 神との歩みを通して、エノクは神を知っていただけでなく、熱心に神を探し求める人であったことを示した。
  - ii. 私たちの歩みは、主と私関係について何を語っているだろうか？ 私たちの歩み、私たちの生き方を見て、私たちは神を知っていて、熱心に神を探し求めているという結論に至るだろうか？
    - 聖書は、キリストに従う私たちが、視覚によってではなく、信仰によって歩むべきことを述べている。(2コ5:7)
    - 私たちは肉によらず、御霊に従って歩むべきなのだ。実際、パウロはローマ人への手紙の中で、肉にある間は神を喜ばせることは不可能だと語っている。(ロマ8:8)。
    - 神に喜ばれる歩みをしたいのなら、肉に導かれてはならない。神の御霊と神の導きに人生を委ねなければならない。
  - iii. 私たちは、エノクの生涯を通して、信仰と私たちの歩みについての教訓を見ることができる。私たちの歩みがいかに御霊に導かれる必要があるか、私たちがいかに視覚ではなく信仰によって歩むべきか、私たちの生き方によっていかに神を喜ばせることができるか、である。
    - i. 私たち皆に望むことは、私たちの歩みが神への信仰を示すものであることだ。私たちの歩みが喜ばせるものであること。私たちの歩みが、私たちが神を知り、神との個人的な関係を持っているだけでなく、神との関係を成長させるために、熱心に神を探し求める者であることを示している。
3. 本文を続けて、私たちに信仰を示したもう一人の人物を見てみよう。
- D. 7節には、"信仰によって、ノアは、まだ見ぬものに対する神の警告を受け、神の恐れに動かされ、自分の家族を救うために箱舟を用意し、それによって世を断罪し、信仰に基づく義を受け継ぐ者となった。"とある。
1. ノアについて、私たちは皆知っているよね？ それも創世記に書かれている。そして、ノアの人生と彼の信仰生活から学ぶことのできる教訓は非常に多い。
  2. ノアは、罪と悪が蔓延していた時代に生きた。ノアの時代について、「人の悪は満ち、人の心のことごとく悪のみであった」と言われている。ノアは恐ろしい時代に生きた。(創世記6:5)。
  3. しかし、6章8節には、ノアが主の目に恵みを見出したと記されている。(創世記6:8)
  4. 彼を取り巻くすべての悪と邪悪にもかかわらず、ノアは正義の人であり、代々完全であり、ノアは神とともに歩んだ。(創世記6:9)。
  - a. さて、彼が公正で完全であったというのは、罪がなかったという意味ではなく、単に主との正しい関係があったという意味である。彼は、彼の前に現れたエノクのように、神と共に歩み、信仰生活を送り、主を喜ばせた。

5. ご存知のように、神はノアのもとを訪れ、壊滅的な大洪水によって地球を絶滅させる計画を告げ、洪水を生き延びるための箱舟を作るようノアに指示した。
6. 神はノアに、箱舟を作り終えたら、妻と息子たち、そして彼らの妻も一緒に箱舟に乗るようにと告げた。そして、地上の野生生物を救うために、地表を歩く、あるいは地表を飛ぶすべての生き物を、オスとメスの2匹ずつ、ノアとその家族と共に箱舟に乗せる、と。
7. では、そのシナリオをちょっと想像してみよう。
  - a. あなたは、人々の心が絶えず邪悪である時代と場所に生きている。しかし、あなたは主のために生き、主を敬い、信仰生活を送るために最善を尽くしている。
  - b. そして神がやってきて、自分と自分の家族、そして大勢の動物たちが住むための巨大な舟を作るように指示し、その間に神は地表全体に壊滅的な洪水を送り込む。
  - c. 誰も見たことのない、いや、想像すらしたことのないことが起こるのだ。あなたは砂漠の真ん中に住んでいて、ポートには何の価値もない。
  - d. 神に言われたとおりにするのか？ それとも、神を疑って、神の計画は意味がない、神の計画はあなたをカッコーのように見せようとしている、と神に言うのか？
8. さて、ノアは信仰によって、神的な恐れに動かされ、自分と家族、そしてすべての動物たちのために箱舟を準備し始めた。
  - a. それだけでなく、その、ノアは義の伝道者であったと聖書は伝えている。(2 Pt. 2:5a)
  - b. 彼が箱舟を建造し、神に召された仕事をし始めると、人々がやってきて、彼が何をしているのか尋ねた。
  - c. 「やあ、ノア！ 何してるんだ？ こんな怪物を作って何に使うんだ？」
  - d. そしてノアはそれに対して、箱舟が何のためにあるのかを正確に伝えた。人々に罪から立ち返るように呼びかけ、来るべき裁きを警告したのだ。
  - e. 彼は神にれた仕事を忠実にこなしただけでなく、差し迫った神の裁きを人々に警告した。
  - f. 神に召された仕事を恥ずかしがらず、聞く人すべてに神のメッセージを伝えた。
  - g. ノアは**仕事を通して**信仰を示した。彼は神に召さ仕事に忠実だった。そして彼は、神に召されたことに忠実であることの大切さを私たちに教えている。

- i. 聖書によれば、私たちは良い行いのためにキリスト・イエスにあって造られた神の作品であり、神は私たちがその道に歩むようにとあらかじめ備えておられた。(エペソ2:10)。
  - ii. 神は、私たち一人ひとりに召された特定の仕事を持っている。そして神は、私たちがその仕事に忠実であることを期待しておられる。私たちは主に仕える者、神秘を管理する者として召されている。そして聖書は、執事に最も求められているのは、忠実であることだと言っている。(1コリント4:2)
  - iii. 周りの誰もがことをしているのに、私たちは神に召さ仕事に忠実でいられるだろうか？
  - iv. そうすることで、自分たちが狂っているように見えても、神に召された仕事に忠実であろうか？
  - v. 私たちの労働から実りの証拠が見えないとき、私たちは神に召された仕事に忠実でいられるだろうか？
    - ノアは何年も何年も説教を続けたが、一人も主を信じるようにならなかった。救われたのは彼の家族だけだった。それ自体に教訓がある。自分の家族に救いをもたらすために、あなたはどこまでできるだろうか？
  - vi. 私たちは、神が私たちに召された仕事が、私たち自身や私たち自身の考えにとって意味をなさないものであったとしても、その仕事に忠実でいられるだろうか？
  - vii. 人生の嵐が訪れ、痛みや困難、心痛を経験するとき、私たちは神の御業に忠実でいられるだろうか？
  - h. ノアはそうした。そして希望は、私たちがノアの生涯から学び、同じようにすることである。ノアは神にれた仕事に忠実だった。そして、信仰に基づく来るべき義を受け継ぐ者となった。
9. (復習) 私たちの周りが崩壊しつつある世界で、私たちも義を受け継ぐ者として生きることができるように。神に召された仕事を通して信仰を示す者となるように。私たちの信仰が、主への礼拝において、また主との歩みにおいて示されるように。
- a. アーメン？ アーメン祈ろう。